

破片の島、幻の津

岸田将幸

津、島、

破片の島、津

津の先へ

ゆく

こと……

（あなたと出会えてよかったから、私というものがもし、あるのならば、私はあなた以上に、あなたとなりたと思う——）

島、津

忘れ難き、あなたの津

そして島

故郷というものがもし、あるならば、故郷とは何かと問うよりも早く、故郷を去ること。きつと、その優しい別れの言葉が、私をあなたの胸もとに引き寄せた。それから、私はあなたの胸のうちに小さな隙間を残し、あなたは私の胸の底に、水滴をひとつ落とし、互いに消えた。そう記憶している。

——、ツ

故郷の奥へ

（片目で見る不確かさのなかで……）

松山駅前のバッテリーセンター、駅前スタジアムは開店しない。駅前はまったく明るい。僕はなるべく出発に遅れるべく、列車の乗客がクモの子を散らすように、降りて去ってゆくのを数えていた。せわしく、時計の秒針を見て。しかし僕は、深い沈黙と強い無言を今日の風とすべく、急いで列車に飛び乗らねばならないのだ。故郷には神話がなかったから。その上、僕には物語が禁じられているのだから。驚いて、ほんとうに驚いて飛び乗らねばならないのだ。

去って行った人は去り、その後背はすでに別の者である。そう告げられたとしても、風向きに変わりはあるまい。

「出発を告げる駅員の人、もっと語尾を伸ばしてアナウンスをしてください」

（詩とは何かと問うよりも早く、詩を書くこと。そんなことができるのか……）

朝だ（夜だとしても）

南へ

（仮）故郷

（そういえば、あのこと……。あんなことがあった……）

（育ツタ場所ノ近く、オヨソ二百五十年前ニハ廃寺トナツテイツタトイフ、一重山三願寺跡ニハ、私ノ守ルベキ最初ノモノ、ソシテ、最後ノモノガアル。シカシ、時代ガ変ワリ、アナタハ再ビ、私ヲ守ラネバナラナイ、ト思フ……）

私が（一人で、いやもう、私は一人にも足りず……）訪ねると、

“ 出て行つてはならない ”

湧き出す泉の、透明な水の砂が話す

“ いや、私ではない、おまえが覚えているのだ ”

少し、冷や汗をかき、古いお地蔵さんに頭を下げ、私は迷っている者です。いつからか、そしてこれからもずっと。と、小さな思いの声（誰の声？）を供えて、ここは星雲が廃れた跡なのだろうか。廃寺跡の古径を辿り、目を瞑り、頭を下げ、県道へと抜けた。

私は、迷っているようだ――

一本松から宿毛へ

津、島

を過ぎ、

秋、沢、

沢、瀬、

の宿へ

(もう冬だ)

秋の沢、
美しい過去、
の水気

スクモ。

不思議な地名
夕暮れだ。

宿毛青果

クサキハラ作業服

と、窓から見える。
目を凝らせば

焼肉キララ

モーレッツ弁当

とも、ある。

一生に一度か、
それくらい

生きてゆくための、
生業の看板
を掲げる

感傷に浸ることが、仕事ではないのだ

(感傷ドロロジヤナイ、モウ、死ニソウナンダ)

(誰の、誰の……、誰の声)

宿毛から足摺へ

偽者の、偽の哀しさ

偽の記憶（入沢康夫詩集）、記憶の哀しみ

（宿毛中心街、愛媛銀行宿毛支店前の通りハ、途中から道幅が狭くなっていテ、そのすばまりに当たる、街角ニ立ってイルト、古イ人ノ足音が甦リ、迫ツテクル氣ガシテ、胸ガ詰マツタ——）

偽、者

津、島の、偽、者

僕の、大切な、人は、偽、ではない

大切な、人が、偽で、なければ

僕は、偽ではない

国道321号、サニロードをゆく

足摺海底館

螺旋階段を降りて、辿り着いた海底には丸窓が幾つも設けられていた。僕はきつと、独りでは話していなかったと思う。…さん、…さん、原風景の先にはこんな、夢のような場所がある。

僕の声は夢だ——

（私は短足の十字架）

（あなたに私はなりたい）

（海のなかに独り、立つ人）

（僕の大切な人は決して、偽ではない）

（彼は本物なのだろうか、それとも……）

（彼は本当に、本当に、）

（I have a pen.）

（I am a pen.）

絶対と言い切ることで、現れるものがあつたと思う——

(死者を悼むとは、死者と心中することだ)

意味とは必然のこと)

(命のない者は命ある者にどういう姿で迫って来るか)

後ろ向き、ただ後ろ向きに)

(すべては夢であった)

愛ゆえ夢を差し出す)

死んだ者よ。俺に加勢せよ。俺が信じるところを信じよ。これ以降は俺の力ではない。死んだ者は俺が生きようとするところに。死んだ者は――

(すべては積る崩れる、という運動として捉えることで、すべてのが説明できると思う。また会えると思う)

(決然とした死後に、決然と背を向けることだ。二度と会えないと思う)

(魚、魚)

(誰かの声が、何も伝えない声)

言葉の切れ端は、切れ端と戯れて別の会話へと移ろい、また切れる

飯の住まいは崩れてはまた飯に整えられて、ひと時ともにある家族を休ませる

海底館をはじめて訪れた人に、僕はそう解説したと思う

(まるで海のようにですね)とはじめて訪れた人は答えたと思う

そして、別れたと思う

(足摺海底館は日本初の海中公園で、タテモノのなかから自然豊かな海の様子を見て頂けます。きっとそれは、未来の記憶だと思えます――)

足摺海底館ハ大人九百円。年中無休。荒天時臨時休業アリ。

足摺岬

津、涯ての
島の、津
もはや、津という、
細身の島、細り
何もない
何もない
やっぱり、何もない

中浜万次郎の銅像がある。

「『歳』のとき出漁中、嵐にあい遙か南方の無人島、鳥島に吹き流されたが、半年のち運よく通りかかったアメリカの捕鯨船 John Howland 号に救助された（……）明治2年には東京大学の前身である開成学校の教授に任ぜられた。『歳』のとき、すこしく健康をそこねて公的な活動からしりぞき、数奇な運命の生涯を』『歳』で閉じている」（碑文）

誰が書イタノカ。

キット、誰カが書イタ。

もう一度、足摺岬へ

私たちは気分を問題としているのではない

世界を覆す夢

土から覆される、夢のような世界

風の、その涯て

粉々を、粉々に。

その粉を、粉に。

粉は人。人は粉。

人は死んだ。

というより、

消えた。

焼く。
切る。
破裂させる。

人に手を合わせてはいけない

きれいだ。

何もない。

何もない。

岬の先には

何もない。

彼ら、

彼らはきれいな人たちだった。

以後、

彼らはきれいな人たちである。

破片の島、幻の津

津、津、

島なく、島はなく

島の津は破れ

津の島は幻

ただ、船が

船だけが戻って来る

カラとなって。

やがて、壊れ、

色が剥げ、

毀れ、

裂け、る

私たちはそれをさらに割り、持ち帰る。
別の火の薪として。

(喫茶HUG)

古い店を出て

(もう少し、かたくなでなければ、いろんなものにきよならず済んだのに――)

泣いてどうする

俺は忘れられない

俺が忘れる、

忘れる側だ

後日のハグ

すでに忘れた者へのハグ

もし、僕が、あなたと二人で、向かい合って、座ることがあるならば

只、泣くと思う

あなたが誰か、分からないから

故郷

人は人であることの理由を吐き続けている

「きみはこんな場所のことは忘れたほうがいい」

「僕だけが覚えている。そして、僕だけが忘れる」